I knew

ゆーきち

僕は一人でいることが好きだった。いつからか、人と一緒にいるときは何かしらの理由があるときに限定されるようになった。

今日も一人で講義を受け、一人で昼食をとり、一人で課題用の本を探し、一人で帰る予定だった。この変化のない時間が、心の平穏を保っていた。

「あっ……」

大学構内の図書館にて課題のための書籍に手をかけたところで、横から息をのむ音が聞こえた。声のした方を見ても誰もいない。今まで心霊現象に出くわしたことはないが、まさか昼間の学校で遭遇するとは。書庫の重苦しさと埃混じりの空気では、幽霊も息苦しかろう。

ふと、視界の下端に頭頂部があることに気づいた。僕の身長がそれなりに高いこともあって、身長差のある相手に気づけなかったようだ。

「ご、ごめんなさい、その本、私、読もうと思って……」

僕との身長差から、少し怯えたような表情の女学生がいた。頭三つ分以上も身長差のある男が見下ろしているのだから無理もない か。この本が必要ということは、同じ講義を受けているのだろうか。いつも一人の僕には知る由もないことだ。

さて、どうしたものか。先に僕がこの本を取ったのだから、僕がこのまま持ち帰ってもいいのだが、なくてもそこまで困らない。生真面目そうな銀縁眼鏡の奥の瞳からは焦燥や恐れと言った感情が見てとれた。

「先に使ってください、私はその後で借りるので！」

そう言い残して立ち去ろうとする彼女に、自分でもよく分からないが、声をかけてしまっていた。

「待ってください」

なんでこの時に彼女を呼び止めたのか、自分でも分からない。もしかしたら困っている彼女を救うことで優位に立ったつもりになっていたのかもしれない。兎にも角にも、僕は彼女を呼び止めていた。

「僕のことは気にせずお先にどうぞ。課題ができないと困るでしょう」

彼女は困ったような、照れ隠しをするようにはにかんだ。変なことを言った自覚はないのだが。

「あの、実は、課題とかゼミではなくて、個人的に読もうと思って……」

……なんと。この本は哲学的を扱っていて、抽象的で難解、面白くもなんともない。本棚や本の頭に埃が溜まっているところを見るに、長いこと誰も借りていないことだろう。僕も課題でなければ読みたいと思わない。そういえば彼女は使いたいではなく読みたいと言っていた。

「この本が好きなんですか？」

純粋に疑問に感じてしまった。この言い方は失礼かもしれないが、この本を個人的に読もうと思うのは正直変わっていると思う。

「え、あ、はい、まあ、それなりに」

この顔は嘘をついている顔だ。それなりではない、相当ハマり込んでいる。そうでなければそもそも書庫の奥にまで取りに来ないはずだ。

「だったらなおさら僕よりも借りるべきです。そのほうがこの本も浮かばれるはずなので」

本を故人のように言ってしまったが、言わんとすることは伝わったようだ。

「あ、ありがとう、ございます。この本、ずっと探してて……」

やはりこの本が相当好きなようだ。課題は振り出しに戻ってしまったが、彼女の望みを叶えられたので妙に満足感があった。

彼女とはそのまま別れ、僕は課題のための資料探しを再開した。……ものの、課題に適合する資料が見つからず、その日はそのまま帰宅した。焦らずともまだ時間はあるのでゆっくり探していこう。

あれから瞬く間に一週間が過ぎ去った。僕はいまだに納得のいく資料を見つけられないでいた。資料などなくても課題は仕上げられるが、彼女と出会ったときから異様にこの分野に興味を持ってしまった。

「参ったな……」

課題よりも自分のこだわりというか執着というかに手を焼いていた。元々大学の学問に熱を注ぐつもりはなかったのに。

「あ、あの！」

またもや一週間前と同じように、書庫の奥で声をかけられた。今度は声の主をすぐに視界に入れる。

「先週は、ありがとうございました。ぜひ、使ってください」

頭を下げながら両手で本を差し出してくる。件の本にはところどころ付箋が貼られていた。

「この付箋は？」

顔を上げた彼女は、眼鏡をクイと直しながら、少し得意げに語り出した。

「私なりに、この本の要点の箇所に付箋を貼ってみました。きっと、課題の参考になると思いますよ？」

「僕が課題のためにこの本を探してるって分かったんですか？」

彼女はあの、困ったような、照れたような表情で再びはにかんだ。

「この本は、すごく面白いと思いますけど、私以外に読む人は、課題やゼミのためでしか見たことがなくて……」

なるほど、自分の趣向が一般的でないことを自覚しているようだ。

「すごく助かるけど、この本を数日で読んで理解するのにはちょっと……」

この本は非常に難解だ。数日で読んで理解して、その上で課題に落とし込めるとは思えない。課題の締め切りはもう差し迫ってい

た。
「あ、そっか……。じ、じゃあ！」
彼女は逡巡を経た後、新たな提案を口にした。
「私が、あなたに、この本について教えます！　分からないことがあれば、私が解説します！」
……なんと。おとなしそうな雰囲気ながら、こんな提案をしてくるとは。それも異性に。しかし。
「さすがに悪いです。課題くらい自分でなんとかしないと」
自分で言いつつ、名残惜しさを禁じ得ないのはなぜだろう。多分彼女のような博識な人物からこの分野について学びたいからだ。
「いえ、このくらいしないと、私の気が済まないです！　今から時間ありますか？」
「あるけど……」
彼女の積極性に感謝している自分がいた。なんにせよ、課題が良いものに仕上がるのは喜ばしい。

大学に併設されているカフェで件の本についてのレクチャーを受けた。この本について語る彼女は、初対面の時のようなたどたどしさはなく、流水のように滑らかに、図書館のように膨大な知識が溢れてきた。
「……と、いうわけで、知るということは知らないということを認識することであるということに結びつくわけです」
まるでサンタクロースに出会った子どものように興奮気味に語る彼女に、僕はいささか感心していた。彼女の知識だけではない、この難解なトピックを素人の僕に理解できるように伝播できる能力が、単純にすごいと思った。
「ありがとうございます。おかげで課題が仕上がりそうですよ」
素直にお礼を述べると、彼女は勢いよくかぶりを振った。
「とんでもないです！　とはいっても、課題が終わってしまうと、話せる人がいなくなるのは、少し残念ですね……」
後半につれて、以前の彼女に戻っていくように見えた。そう、僕はただ課題を提出するために話を聞いているだけ。彼女は僕の恩に報いるため。僕たちの関係は、それだけだ。
「それでも、あなたの話は面白かったです。課題とか関係なく、聞けてよかった」
これでこの話も終わりかと思うと、僕も少し残念だ。かといってこれ以上彼女と関わる理由もない。
僕たちは歯切れ悪くそのままカフェを後にした。

調子が悪くなったのは、課題を提出し終えてからだ。
相も変わらずその講義では課題が出されたのだが、以前のように身が入らない。彼女の話を聞いてから、この講義に興味が惹かれたと思っていたのに。
おかしい。ふとした瞬間に、あの眼鏡をかけた小柄な子は何をしてるだろうかと考えてしまう。一人でいるのが好きだったはずなのに。何も失っていないはずなのに、心に穴が空いたようだ。もしく

は、穴が空いていることすら知らなかったのかもしれない。
この感情を、僕は知らない。しかし、知らないということを認識している。いや、本当はとっくに気づいている。

思い立つと僕は再び図書館に足を運んでいた。本を探しにではなく、人を探しに。知識を得るためではなく、心の穴を埋めるために。

彼女は、思った通り、書庫の奥にいた。品定めをするように本の壁を眺めていた。

「あの！」

僕は彼女に声をかけた。彼女は一瞬ピクリと身を震わせた後に、こちらに振り向いた。僕を認識した瞬間、レンズの向こう側で目を細めるのが分かった。

「また、お話を聞かせてくれませんか？　哲学のこと知りた…」

そこまで口にして、僕は言葉を止めた。知らなかった感情の存在を知った僕には、すでにこんな理由づけは必要なかった。

「あなたと、話したいから」